専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は１３回生の廣田瑞穂です。

私は、専攻科福祉専攻に入学する前に幼稚園教諭として働いていました。子どもを教育する中で、生きることについて考えるようになりました。それは、大好きだった祖母の死に直面。その後、元気でいた祖父の老いに戸惑ったことがきっかけでした。祖母の死に加え、祖父の老化は当時の私にはどうしても受け止められない現実にある中で専攻科福祉専攻に出会いました。

困惑していた私に、大林先生は「特に大切な人を亡くしたり、年老いて姿を見るとき、なかなか受け入れられないのは、当たり前で恥ずかしいことではありません。専攻科福祉専攻でぜひ死生観を養ってください。」と言われた瞬間、ここで学びたい！と専攻科福祉専攻の入学を決めました。入学後、大林先生の授業のゲストに来られた故堀田先生(生と死を考える会、豊橋ホスピスの会)より『死ぬことは誰もが経験することであり、怖いものではない。』とその言葉を聞いたとき、「当たり前のこと」を私は受け入れられずいたのに気が付いて、涙が止まらなくなり、幼稚園教諭として人の始まりから専攻科福祉専攻で終わりについて学ぶことは、人間の一生を大切に生きることを考えることになる、仕事の選択の仕方や生き方まで変わることができるのだと教えてくれました。いつか終わるならから、いつか終わるのだからと考えるようになり、どんな状況にある人もいい時間を過ごせるようにすること！が大切であるとも。「それが、介護の対象者ならなおさらのはず」、なかなか誰も教えてくれなかった当たり前のことを受け入れられず、あいまいにしてきた不安が希望に変わった瞬間でもありました。

その授業を受けてから私は、祖父の老いを受け止められ、関わり方が変わりました。今の目の前にいる祖父の姿から今まで生きてきた全ての姿を見つめられることができるようになりました。

卒業後は特別養護老化ホームに就職し、実際に看取りも行ってきました。その中でどうしたら患者様が終末期を明るく過ごせるか、相手の気持ちになり寄り添い考えてきました。大好きだった患者様が最後に手を握って亡くなっていったときには心からのありがとうが言えました。又、大好きだった祖父にもしっかりとお別れを言うことができました。

幼児教育から始まった人間への関心は、専攻科福祉専攻に来て、始まりがあれば終わりがある当たり前のことに向き合うことの価値を学び、私を元気付けてくれました。

現在、２ 児の母親になった私ですが、時折「命にありがとう」と感謝したくなるときがあります。こんな気持ちにさせてくださっているのは、そこで命をゆだねた方々のように感じる、これが私の正直な気持ちです。

専攻科福祉専攻は今後の社会で最も必要な授業だと思います。増して、増えていかなければいけない保育士資格を取得した介護専門職を育てる必要な教育だとも感じています。人の一生を見通して見えてくるものは、「限りある命」を「どうよりよく生きていくか」、人の始まりと終わりに接して２児の子どもの母となってみて、今の子ども達がこの先大きな壁にぶつかった時、専攻科福祉専攻で受けた学びがあれば、自分自身でどうやって生きていくか、生きる術を見つけることができると思います。

専攻科福祉専攻科は、ただの介護を勉強するだけの場ではありませんでした。私にとっては生き方を教えてくれた大切な場所です。

2021 年 12 月

13 回生　廣田瑞穂